

日本産アスパラガス加害葉蟲類¹⁾

湯 淺 啓 温

THE ASPARAGUS BEETLES IN NIPPON.

By HIROHARU YUASA.

従來我國に於てアスパラガスを加害する葉蟲としては、北海道に於てカタボシクビナガハムシ *Crioceris orientalis* JACOBY の幼蟲が子實を食害することが知られてゐただけである。²⁾

然るに、著者は昭和11年5月長野縣農事試験場田邊技師から同縣に於てアスパラガスを加害するといふ葉蟲の1種を送られ、之が同定を求められた。之は上のカタボシクビナガハムシと異なる種で、従來本邦からは對馬だけから知られてゐたジフシホシクビナガハムシ *Crioceris quatuordecimpunctata* (SCOPOLI) であつた。

なほ、著者は昨昭和12年7月親しく長野縣に於けるアスパラガス被害地を視察したところ、ジフシホシクビナガハムシのほか、従來同じく本州未記録であつたカタボシクビナガハムシも少数混在してゐることを認めた。

而も、本邦産ジフシホシクビナガハムシは其後の精査に依つて歐洲産原種と區別すべきものであることが判り、又本州産カタボシクビナガハムシは北海道産原種と聊か異なる所があるので、次に之等2種に關する分類學的研究の結果を記述し、且新分布地の記録をもなしておかうと思ふ。

- 1) この稿を草するに當つて、種々調査に便宜を與へられた長野縣農事試験場技師田邊忠一氏竝に貴重な標本を寄贈又は貸與された北海道農事試験場技師桑山博士、九州帝大教授江崎博士、臺北帝大中條道夫氏、八戸市福田進氏に深甚の謝意を表する次第である。
- 2) 北海道農事試験場. 1935. 試験及調査の成績に鑑み指導獎勵上注意すべき事項 第五輯: 200.
宮澤春水. 北海道に於ける加工用園藝作物の栽培 (園藝講習會講演要録 第四輯別刷): 76.

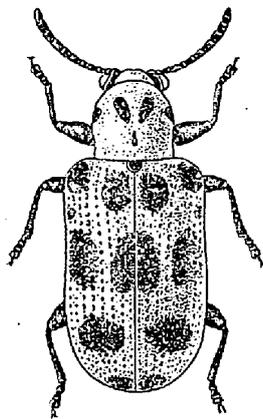
1. *Crioceris quatuordecimpunctata* (SCOPOLI) var. *sibirica* WEISE

ジフシホシクビナガハムシ

Crioceris 14-punctata SCOP. var. *sibirica* WEISE, Arch. f. Naturg., LIII, 1887, p. 165.—JACOBY et CLAVAREAU, Gen. Ins., XXIII, 1904, p. 27.—CLAVAREAU, Col. Cat. (JUNK-SCHENKLING), LI, 1913, p. 50.

Crioceris 14-punctata BALY, Trans. Ent. Soc. Lond., 1873, p. 77.—LEWIS, Ent. Month. Mag., X, 1874, p. 174; Cat. Col. Jap. Archip., 1879, p. 27.—JACOBY, Proc. Zool. Soc. Lond., 1885, p. 753.—SCHÖNFELDT, Cat. Col. Jap., 1887, p. 143.—土井, 昆蟲世界, XXX, 1926, p. 220.—СНУТЪ, Шилпия, IV, 1933, p. 27.

長野縣産のジフシホシクビナガハムシの標本はすべて次の諸點で歐洲産の *Crioceris quatuordecimpunctata* (SCOPOLI) と異つてゐる。



第 1 圖

Crioceris quatuordecimpunctata (SCOPOLI) var. *sibirica* WEISE (長野縣小縣郡禰津村産)

- 1) 一般に翅鞘上の斑紋は大形である。
- 2) 翅鞘第 2 列外側紋は横長でなくて圓形又は縦長である。
- 3) 同列内側紋は會合線に密接し、且屢兩翅鞘上のものが結合して 1 紋を形成する。
- 4) 同第 3 列の 1 紋はほぼ横位の橢圓形。
- 5) 脚は全く黑色。

之等の諸點は WEISE が Amur から記載した上の變種に相當する。³⁾ ただ、WEISE の原記載では前胸背板の小楯板前方の 1 紋が常に缺けてゐるとしてあるが、この紋は後述の通り本邦産標本では普通存在するけれども少數の個體では消失してゐて、變化し得るものであるから、特に取擧げるべき標徴とは考へられない。

而して、從來本邦産のものは BOWRING 並に A. ADAMS が對馬で採集したものを BALY が歐洲産原種と同じものとして記録したのに據つてゐるのであるが、

3) 或は亞種として取扱ふべきではないかと考へてゐるが、今は暫くこの儘としておく。

私は中條道夫氏の好意に依つて臺灣總督府中央研究所農業部所藏の ADAMS 採集の同島産 2 標本を検することを得、之も長野縣産のものと大差のないことを知り得たから、今迄對馬から記録した *Crioceris quatuordecimpunctata* は全部變種 *sibirica* としてよいと思ふ。又、土井が「岩手縣のものにして歐洲産の *quatuordecimpunctata* に類似するものを檢したるに黒斑は歐洲産より大にして全く別種なりと思考せり」と云つてゐる所から判斷すると、土井の檢した岩手縣産標本も恐らく本變種であつたらうと思はれる。なほ、最近本變種が青森縣八戸市に産し、同地でもアスパラガスについてゐたことを知つた。

更に、BALY が對馬から記録する際 “the insects from China and Japan have the black spots on the elytra more fully developed than those from Siberia and Eastern Europe.” と述べてゐるところから見ると、支那産のものも或は日本産と同じく變種 *sibirica* であるかと想像される。

次に、この葉蟲は個體に依つて斑紋の變異が可なり甚しいから、下にその點に就いて記しておく。

頭部頭頂は赤色、對馬産標本ではここに大さは多少違ふが 1 黒紋があるけれども、長野縣及び八戸市産のものには全然之が見られなかつた。

前胸背板の中央の 1 對の黒紋は歐洲産原種では小圓形らしいが、本邦産では一般に何れも長目で後方に尖り且互に相接近するを常とする。小楯板前方の 1 紋は次第に小形となり、又淡くなつて遂に *sibirica* の原記載通り全く消失してしまつたものも長野縣産 45 個體中 3 個體ほどあつた。又、中央の 1 對と小楯板前方の 1 紋とが連続したのものも 1 個體存在した。

翅鞘の斑紋は同じ長野縣でも一般に低地(海拔約 630m.) の南安曇郡倭村産標本では小さく、高地(海拔約 1200 m.) の小縣郡禰津村奈良原産標本では大形である。又、對馬産標本は倭村産のものと同大、八戸市産標本は禰津村産のものと同大乃至やや小形の斑紋を有する。

翅鞘第 1 列外方肩部の 1 紋はその後方の 1 小紋と結合しようとするものが多く、第 1 列内方の 1 紋は黑色の小楯板と結合するものがあり、第 2 列外方紋は第 1 列肩紋と結合しようとする傾向が強く、之に更に肩部後方小紋も加はつて 3 紋連続したものもある。第 2 列外方紋は又第 3 列の横紋に連絡しようとする傾向を示したものが 1 個體あつたけれども、完全に結合したものは見當らな

かつた。第2列内方紋は兩翅鞘上のもものが全く結合したものがあり、又この紋が第3列横紋と連続したのもも1個體存在した。之等翅鞘斑紋結合のものは皆彌津村産のものに見られ、其他には對馬産の1個體で肩紋とその後方の1小紋との結合したものがあつただけである。

産地—長野縣小縣郡彌津村奈良原(25頭, 6. VII. 1937, 著者採集)・同縣南安曇郡倭村(20頭, 8. VII. 1937, 著者採集)・八戸市上徒士町(1頭, 7. VII. 1934, 福田進氏採集)・對馬(2頭, A. ADAMS 採集)。

分布—本州(青森縣・7岩手縣・長野縣)・九州(對馬), ?支那, Amur.

2. *Crioceris orientalis* JACOBY.

カタボシクビナガハムシ

Crioceris orientalis JACOBY, Proc. Zool. Soc. Lond., 1885, p. 195.—SCHÖNFELDT, Cat. Col. Jap., 1887, p. 143.—JACOBY et CLAVAREAU, Gen. Ins., XXIII, 1904, p. 28.—JACOBSON, Rev. Russe d'Ent., VII, 1907, p. 26.—土井, 昆蟲世界, XXX, 1926, p. 220.—CHÛJÔ, シルビア, IV, 1933, p. 27.
Crioceris meridigera (nec LINNAEUS) CLAVAREAU, Col. Cat. (JUNK-SCHENKLING), LI, 1913, p. 48.

本種は従來北海道だけから知られてゐたのであるが、今度初めて長野縣に分布してゐることを知つただけでなく、其後青森縣八戸市産の1標本をも検することが出来た。

而して、北海道では本種の幼蟲はアスパラガスの子實を食害するけれども、長野縣では未だ野外で之を確めてゐない。八戸市産成蟲標本もアスパラガスで得られたといふけれどもそれ以上のことは判つてゐない。

なほ、本州産のものは北海道産のものとは異つて、翅鞘肩部の1紋以外に翅鞘中部後方に1又は2個の黒紋を有してゐる。この點で一見別種の觀があつたので、北海道産標本を桑山博士にお送り願つて比較したところ、斑紋の相違を除けば全く同一種と認められた。しかし、この翅鞘斑紋の相違に依つて本州産のものはやはり北海道産原種と區別した方がよいと思ふので、次に之等のため

に3新異常型を記載しようと思ふ。⁴⁾

2a. *Crioceris orientalis* JACOBY ab. *sakahati* nov.

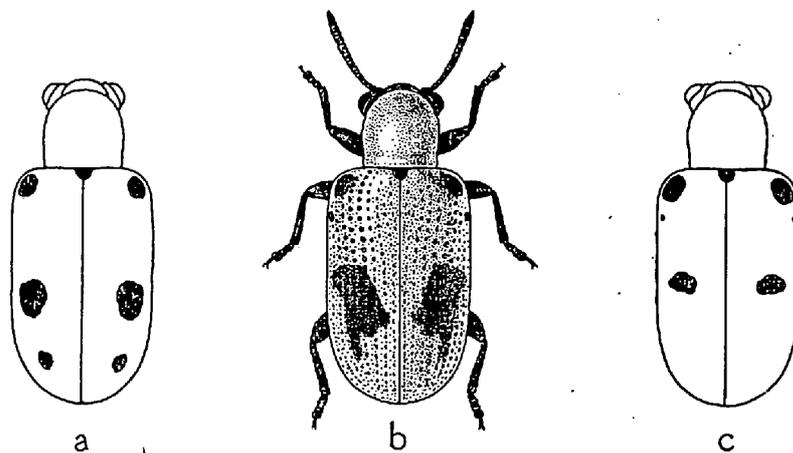
この異常型の原種と異なる点は次の通り。

1) 翅鞘のほぼ中央部の外方から斜後内方會合線へ向つて走るやや太目の1紋を有する。(この紋の形は變異に富み、圖示したやうな長いものもあるが、次第に後端部が淡く、短くなつて行く傾向がある。)

2) 翅鞘肩紋の後外方に極めて小形の1紋があるが、個體によつては消失してゐる。

模式標本—3頭、長野縣小縣郡禰津村奈良原、6. VII. 1937 (著者採集)。

なほ、この異常型に屬する八戸市上徒士町産の1頭(10. VI. 1935, 福田進氏採集)を檢した。



第2圖 *Crioceris orientalis* JACOBY. a. ab. *yotubosi* nov.
b. ab. *sakahati* nov. c. ab. *hutahosi* nov.

2b. *Crioceris orientalis* JACOBY ab. *yotubosi* nov.

原種並に他の異常型と異なる点は次の通り。

1) 翅鞘中央部の後方に1圓紋、その後内方にやや小形の1圓紋がある。
2) 他の異常型に見られる翅鞘肩部後外方の1小紋は辛うじてその痕跡が認められるに過ぎない。

4) 本州産のものは1群として北海道産原種と對立する位置を與へられ、更にその内で斑紋の變異に據る型を分けてもよいかと考へられるが、今はすべて原種に對して同格の異常型として取扱つておく。

模式標本は農林省農事試験場昆蟲部の標品中に保存せられる。

模式標本—1 頭，長野縣小縣郡禰津村奈良原，VI. 1937(田邊忠一氏採集)。

この異常型の翅鞘背面の4紋は *ab. sakahati* の完全に發達した斜紋の前後
兩端部に相當してゐるもののやうである。

2c. *Crioceris orientalis* JACOBY *ab. hutahosi* nov.

原種並に他の異常型と異なる點は次の通り。

- 1) 翅鞘のほぼ中央に1小圓紋がある。
- 2) 翅鞘肩部後外方にある1小紋は *ab. sakahati* と同様。

模式標本—2 頭，長野縣小縣郡禰津村奈良原，6. VII. 1937 (著者採集)。

本異常型は *ab. yotubosi* の翅鞘後端の1紋が消失したものと考へられる。
更に、この異常型の残つた2紋が消えると原種と同じになる譯で、現に著者の
檢した北海道産原種標本4頭中2頭には翅鞘中央部に1小圓紋の痕跡の存する
ものがあつた。(なほ、原種標本では翅鞘肩部後外方の1小紋は痕跡も認められ
なかつた。)

新 著 紹 介

三輪勇四郎 — 日本甲蟲分類學

三輪博士は札幌の河野廣道博士と共に松村松年博士の門下の甲蟲分類學專攻の逸材、且
御兩人は國の南北兩端に位置して本邦斯學の2大高峯を形造つてゐる。その三輪博士が十
數年研鑽の結果を以てこの著をものしたのだと云へばおよそ本書の價値は窺ひ得よう。

本書は菊版クロス、本文202頁に索引40頁を添へる。内容は全體 FOWLER の「英領イ
ンド動物相、甲蟲類概説」の構成に則り、總論と各論とに大別され、總論は鞘翅目の標徴、
外部形態、内部形態、色彩、變態、生活、分類の各項から成る。分類はほぼ WEBER の
「昆蟲學教科書」に據つたもののやうで、2 亞目15類の分類式をとり、各論では之に本邦産
103 科を配し、科までの大要を得るやう記述してある。更に、この著を飾るに總論 32、各
論 174 個の挿圖を以てし、而も前者中14、後者中 162 個は著者の原圖で、之だけで斯學に
興味を持つ者は是非 1 本を備へなければならぬと思ふ。ただ、この貴重な圖が、原圖・製
版・印刷の何れに因るのか、案外不出來なのは玉に瑕。又、この挿圖に番號の附してない
ことと昆蟲名が本文と同じく平假名で記してあるのは甚だ不便である。だが、この好著
の現はれたことを斯學のため喜びとする次第である。(湯淺啓温)